

査読論文

湯浅八郎の国際感覚に対するアメリカ滞在の影響 —イリノイ大学留学経験を中心に—

辻 直人*

要旨

本稿は、湯浅八郎の国際感覚が形成されるにあたり、アメリカ滞在での経験がどのように影響したのかを考察した。特に、若き頃のイリノイ大学 YMCA での経験で湯浅がどのように変わったのか、同大学史料室所蔵史料より明らかにした。

湯浅八郎がイリノイ大学大学院に留学中に参加していた YMCA では、外国人学生国際親善委員会主催の交流プログラムが盛んに行われた。留学当時、信仰的精神的にかなり追い込まれていた湯浅は、YMCA での主事らに親身にしてもらい聖書の学び会にも参加するようになった。その後アメリカのあるクリスチャン家庭に招待され、新興国アメリカの文化文明を支えるキリスト教の精神が一般家庭にも浸透していると感じ取った。更に、学生集会に参加してキリスト教精神による軍国主義物質主義の克服や、国際親善の推進を強く意識するようになり、湯浅自身キリスト教信仰を回復することになった。こうしたイリノイ大学での経験が、湯浅の広い国際感覚を育てたのであり、帰国後偏狭な国家主義と対立したのは必然的だったと言える。

また、戦時中のアメリカ滞在中も、少なからず湯浅の思想形成に大きな影響を与えた。今更科学研究分野に戻ることも、キリスト教国際主義の働きに関わりたいたいという思いを強くすることとなった。

ただし、YMCA 活動自身は国際親善を促しても、国家間の紛争や意見の対立を解消することはできなかった。実際中国と日本とで中国大陸における日本軍の動向への捉え方は異なっていた。こうした国家間の対立を克服するには限界があった。

湯浅は終戦後1949年に国際基督教大学 (ICU) 初代学長に就任する。アメリカの諸教会の援助により設立された同大学なので、湯浅がアメリカを熟知していること、キリスト教国際主義の立場だったことが ICU の建学の精神にも合致した。ただし、あくまでもアメリカをバックにした国際主義であることは留保すべきではないか。

キーワード

湯浅八郎, YMCA, 外国人学生国際親善委員会, 国際主義, イリノイ大学

* 執筆者：辻直人

機関/役職：北陸学院大学人間総合学部/教授

機関住所：〒920-1396 石川県金沢市三小牛町イ11番地

E-mail: personnedroite@gmail.com

1. 課題の設定

湯浅八郎(1890~1981年)は1924年に京都帝国大学農学部教授に就任した後、1935年2月に同志社総長に招聘された(1937年12月に辞任)。戦後は1947年に同志社総長に復帰するものの1949年からは国際基督教大学(ICU)の初代学長に就任し、大学草創期の発展に貢献している(1962年まで)。湯浅はその人生史において数々のユニークな経験を積んでいるが、特筆すべき出来事の1つとして、戦時下のアメリカ滞在が挙げられる。太平洋戦争開戦を告げる日本海軍の真珠湾攻撃時にアメリカに滞在していた湯浅は、帰国して軍部に徴用されることを恐れ、自

表1 湯浅八郎略歴

西暦年	湯浅八郎関連事項
1890	4月29日、東京赤坂に生まれる。父治郎(新島襄より洗礼を受ける)、母初子(徳富蘇峰、蘆花の姉にあたる熊本バンドの一員)。
1906	16歳の時に同志社教会で洗礼を受ける。
1908	同志社普通学校(中学)を卒業後、8月、少年移民として単身渡米。カルフォルニアのリヴィングストンの開拓農場で3年間働く。
1911	カンサス農科大学入学。
1915	カンサス農科大学卒業。
1916	イリノイ大学大学院入学、昆虫学専攻。
1917	イリノイ大学大学院 M.A. 取得。
1920	イリノイ大学大学院 Ph.D 取得。
1921	イリノイ州立博物館昆虫技師に就任。6月、シカゴにて鶴飼清子と結婚。
1922	8月、文部省在外研究員に任命。ドイツ、フランスで昆虫学研究。
1924	1月帰国、京都帝国大学農学部に招聘され、教授に就任。
1933	滝川事件に農学部評議員として反対する。
1934	京都帝国大学退任。
1935	2月、同志社第10代総長に就任。
1937	12月、同志社総長辞任。(配属将校の引き上げ問題による)
1938	10月、インドのマドラス世界宣教会議に、日本のキリスト教会代表として賀川豊彦を含む20数名の一員として参加。
1939	1月以降、アメリカ各地を講演旅行。
1941	12月7日日米開戦以降、ルーズ・ベリーによりボストン宅にて保護。戦時中は、ニューヨークで在米日本人救援活動及びユタ州日系人収容所慰問活動。
1945	(5月頃)許可を得てニューヨークに移住。
1946	10月、帰国。ユネスコ運動促進などに務める。
1947	同志社第12代総長に就任。
1950	6月、同志社総長を退任。国際基督教大学総長として、同大学設立準備。
1953	3月、国際基督教大学初代総長に就任。
1962	国際基督教大学総長を退任。
1971	同志社大学より名誉学位を授与。国際基督教大学名誉総長、理事長。
1981	8月15日没(91歳)。

※年譜記載事項は、同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想—湯浅八郎の日本とアメリカ』(YMCA出版、1977年)、湯浅八郎・蝦山政道・日高第四郎・森有正・大塚久雄『私の生きた二十世紀』(日本基督教団出版局、1980年)、イリノイ大学史料室(University Archives)YMCA関係史料等の内容よりまとめたものである。

分の意思でアメリカに留まって、在ニューヨーク日本人の救済活動や西海岸における日系人の強制収容所施設への慰問活動などに取り組んだ。偏狭な国家主義や軍国主義に染まった戦時下において、湯浅はそのような狭い視野を超えた国際性を有していたと考えられる。その感覚を、湯浅はいつどのように獲得していったのだろうか。また、湯浅の国際感覚には、どのような特徴があるのだろうか。

湯浅の思想基盤にキリスト教信仰があることは、同志社総長やICU学長を歴任していることから分かる。そもそも、両親共にクリスチャンであって、母の初子は徳富蘇峰、蘆花の姉にあたり熊本バンドの一員でもあった。また、父の治郎は群馬県安中町の商家の長男で、新島襄より洗礼を受けた人物である。このように、幼い頃からキリスト教の影響下で育てられたことが、湯浅の思想にも影響を与えていると想像できる。しかし、国際感覚そのものは家庭以外のところで育てられたと考えられる。同志社中学校を1908（明治41）年、18歳で卒業した後湯浅は単身アメリカに渡り、1924年に帰国するまでの約16年を欧米で過ごした。つまり、より直接的な影響として、こうした海外経験が湯浅の国際感覚形成に大きな影響を与えている。中でも湯浅のイリノイ大学留学時代（1916年～1920年）、特に大学YMCAでの活動からの影響は非常に大きなものだった。

そこで本稿では、第一に、湯浅八郎がイリノイ大学大学院に留学中に参加していたYMCAの活動実態を明らかにし、湯浅の思想にどのような影響を与えたのか考察をする。また、戦時中のアメリカ滞在中も、少なからず湯浅の思想形成に大きな影響を与えたと考えられるが、実際どのような経験をしたのか、また戦中のイリノイ大学YMCAとの関わりについても明らかにすることを第二の課題としたい。そして第三に、YMCAの国際的活動の限界及び湯浅自身の国際感覚の限界についても考察したい。また、これらの考察から、YMCAを中心とした在米日本人学生の動向についても明らかにすることになるだろう。

2. 史料と先行研究について

使用する主要史料は、イリノイ大学史料室（University Archives）に所蔵されたYMCA関係史料である。この中に、湯浅八郎の留学時代を知る貴重な史料が含まれている。また、20世紀初頭の在米日本人学生の動向を知るための史料として、その他アメリカ各地の大学所蔵の在米日本人学生関連史料も適宜参照した。

湯浅のイリノイ大学留学については、先行研究等ではほとんど触れられていない。先行研究としては武田清子『湯浅八郎と二十世紀』（教文館、2005年）がある。これは湯浅八郎の生涯を丹念に追いながら、湯浅の直面した諸問題が20世紀特有のものであり、「湯浅八郎と二十世紀の諸問題とのかかわりを通して、二十世紀という時代は何であったか？それが内包していた問題、その特質と意味をも問いたい」という問題意識の下で執筆された¹。武田と湯浅は年齢

にして27歳の差があるが、太平洋戦争開戦時に両者ともアメリカに滞在しており、また戦後はICUの同僚となるなど、極めて近い関係であった。そのような関係であったからこそ知ることができる個人的な湯浅の一面も、同書にはふんだんに描かれている。ただし内容としては戦後のICU時代のことに多くの頁を割いており、本稿で検討する若き湯浅のイリノイ大学での経験については極めてあっさりと書かれている。

湯浅本人の回想録を収録した文献も複数刊行されている。同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想 湯浅八郎の日本とアメリカ』(日本YMCA同盟出版部, 1977年)では、イリノイ大学時代のこととして、後で詳述するように、大学代表として参加したアイオワ州デモイン(Des Moines)での学生ボランティア会議(Student Volunteer Convention)の様子について触れられている程度に過ぎない。また、『私の生きた二十世紀』(日本基督教団出版局, 1980年)は大塚久雄や森有正らのICUでの講演を収録した内容で、湯浅八郎が半生を語った講演も同書に収められてはいるが、戦時下のアメリカ滞在に触れている一方で、イリノイ大学滞在については全く語られていない。

いずれの先行研究等もイリノイ大学留学について詳しく触れていないが、実はその留学経験が湯浅にとって大きな転機になったことが、イリノイ大学史料室所蔵史料から明らかになった。

3. イリノイ大学での経験

(1) 大学YMCAと最初の関わり

既に述べた通り、湯浅八郎は同志社中学校を卒業して18歳の時(1908年)に単身渡米している。最初は「少年移民としてアメリカに移住」し²、カリフォルニアの農場で3年間働いていた。しかし、湯浅は単なる移民や出稼ぎではなく、いわば明治後半に日本人青年を中心に流行していた「海外苦学生」の1人だったと考えられる³。なぜなら、学業のために働いて学費を稼いでいたと言えるからである。実際、その後彼は学業生活へと入り、1911年にカンサス農科大学へ入学して1915年に卒業、翌年にイリノイ大学大学院へ進学して昆虫学の研究を専攻し、1917年にM.A.の学位を、1920年にPh.Dを取得した。湯浅本人はイリノイでの日々について、「入学以来、ずっと奨学金をもらって勉強をしました。苦しくはあったが、自分の専門ですから非常に楽しくもあるし、勉強いちずにやっておりました」⁴という様子しか語っていない。

イリノイ大学大学院で2つの学位を取得していることから、大学院では充実した研究生生活を送っていたのかと想像してしまいが、実はその時の湯浅は精神的、信仰的に順当とは言えない状態だった。一方で、そうした困難を克服する経験もできた、人生の転機とも言える時期でもあった。中でもイリノイ大学YMCAでの活動に参加したことが、湯浅の信仰を改めてかきたてる良い機会になったようだ。以下のような手記がイリノイ大学史料室に残されていた。

私は3代目クリスチャンとして日本からアメリカにきた。私のアメリカ体験は、大学での課程を終える頃であり自らのキリスト教信仰を失っていた時期であった。私はイリノイ大学に科学博士の学位を受けるための研究をする目的で来た。ここでのYMCA活動を通じて、私はキリストを再発見した。私は、YMCAに対して永遠の負い目を負うこととなった。（1939年3月18日）

また、1934年9月29日付のイリノイ大学YMCA総主事（General Secretary）のヘンリー・ウィルソン（Henry E. Wilson）宛書簡（差出人不明）では、『ミッショナリー・ヘラルド（Missionary Herald）』誌に掲載された湯浅の寄稿文の内容が紹介されている。それによれば、湯浅はイリノイ大学YMCAへの謝辞として、YMCAでの経験は自身にとって「負い目」であり、決して払い戻すことができない。「負い目」を返済するには、他者に対する奉仕を推し進める方法しかない、と述べていた。実際、書簡の差出人は、出会った日本人学生の何人かから湯浅の指導者としての評判を聞いていると言う⁵。同誌の寄稿文そのものは未確認であるが、恐らく上記の1939年3月18日付の内容とおおよそ似たようなことを書いていたのではないか。

湯浅とイリノイ大学YMCAとの関わりはとても深いものであった。まず、その関わりの始まりについて、見ていきたい⁶。イリノイ大学に入学したての頃、湯浅の信仰は揺らいでいた。在籍時にイリノイ大学YMCA主事（Secretary）を務めていたC.D.ヘイズ（Hayes）によれば、最初に会った時の湯浅は「とても不幸せそうな表情をしていた」。アメリカ人たちの親しげな態度を皮肉り、日本のことも批判的に話して、日本に帰るつもりはない、と語っていた。何より、日本にいる家族と疎遠になっていることが大きな要因ではないか、とヘイズは推測している。

最初に彼の言動を心配したのは、同じくイリノイ大学で学んでいた日本人学生だった。当時イリノイ大学には日本人学生会（Japanese Student Association）が存在しており、湯浅の在籍していた1918年には15名の日本人学生が所属していた⁷。そのメンバーの1人のクリスチャンは湯浅のことを気にしており、ヘイズと何ヶ月にも渡り毎週祈っていたと言う。その後ヘイズから湯浅に直接声をかける機会がめぐってきた。ヘイズは湯浅に、夏に行われるYMCAレイク・ジェノヴァ学生集会に参加するよう誘うことができたのである。このことがきっかけとなり、直接話をするようになった。湯浅はヘイズに対し、自分は信仰を失ったこと、哲学的疑問に対しても納得できない感情を持っていること、かつての単純な神への信頼を取り戻したいと切望していることを正直に告白した。結局この時は湯浅の学生集会への参加は叶わず、役立つ本を紹介するに留まったが、引き続きYMCAから湯浅への働きかけは続いた。

秋になって、キャンパス内にある教会と関わりを持つ宗教教育学教授がヘイズのもとを訪ね、外国人学生のための働きを手伝う機会がないか尋ねてきた。そしてイトウという名のある熱心な日本人クリスチャンの協力により、キリスト教信仰の原理に関する日本人学生のための学び

会が組織されて、湯浅も定期的に参加するようになった。この学び会では、聖書をめぐる議論よりも、この教授が彼の抱える問題に対し誠実な関わりをしたことが、より効果的だった。このように、主事が直接湯浅と接触したこと、また学生会のメンバーが熱心に祈っていたこと、日本人のためのバイブルクラスが作られ湯浅も参加できたことが、最初の大きな出来事であった。

(2) アメリカ人家庭への招待

大学 YMCA では、この他にも湯浅の人生にとって大きな影響を与えた出来事があった。その1つが、アメリカ人家庭への招待だった。この年、イトウと湯浅が同じ家庭に招かれた。実際に2人の学生を受け入れた家庭の婦人エルシー・M・オーガスティン (Elsie M. Augustine) よりヘイズ宛に送られた手紙が、彼らの訪問の意味を明らかにしている⁸。以下、全文を詳しく紹介しよう。

私たちは感謝祭の日に、二人の日本人学生を我が家に招くことができ、あなたに恩義を感じています。湯浅さんもイトウさんも優しく、教養のある若者で大変興味深く感じました。イトウさんはアメリカに関する全てのことに心底熱狂していることが印象的でした。キリストを愛し、大学生活においてキリストを伝えることに忠誠を尽くすほどの信仰者である日本人学生と関わりを持つことは、とても良いことと思いました。

私にとって湯浅さんのことは大変印象に残りました。我が家にやって来た彼を見て、異国の地で1人孤独を感じている人を楽しませようと感じたのです。そこで私は彼と競技場まで歩き、高校のフットボールの定期試合を観戦しました。彼は私の気持ちを感じたに違いありません。彼は歩きながら私に、自分が11年前に日本を離れて以来初めてクリスチャン家庭で過ごさせてもらっていると話しました。そして、湯浅さんは心の中でキリストに関することを強く熱望しているとも伝えてきました。大学での学業でキリストの教えを心から追い出してしまったため、人生にぽっかり穴が空いていることに気付いたとも述べました。

若い人たちが自分に心から興味を持って話を聞いてくれて、機会あるごとにアドバイスをくれる人と出会うことは、とても大切なことと思います。

試合が終わって家に戻り、夕食を取ってから音楽を楽しみ、2人の興味深いゲストは帰りました。私たち家族は、日本から来た友人たちと過ごした感謝祭ほど、その日を楽しんだことはありません。彼らも、アメリカの感謝祭をありがたく思ったに違いないでしょう。

ヘイズさん、外国人学生を家に招いて、最も親しいアメリカ人の友人をもてなすように彼らを接待することほど、彼らの助けになることはないと確信しました。そのように私は確信しましたし、私の考えが正しかったことは、湯浅さんから届いた手紙から証明されま

した。その内容は以下の通りです。

「私はあなたの家を訪問するのに値しないので断ろうと考えていましたが、あなたやあなたのご家族ともっとお知り合いになった方がいいと考えるようになりました。なぜなら、あなたのご家庭のようなアメリカ人の生活と直接触れる最も良い機会であると思ったからです。私はこの国で11年間住み勉学を積んできましたが、よくよく熟慮して見て、アメリカが今日世界のリーダーとして最も輝いているのは、その文化文明がキリスト教原理に基づいて作り出されていること、そして啓蒙されたクリスチャン家庭にそのことがはっきり示されているという結論に達しました。」

ヘイズさん、これからも私たちに折に触れ外国人学生をゲストとしてお送りくださるなら、とても喜びに感じるでしょう。私たちが彼らにできること以上のことを、彼らは私たちにしてくれるでしょう。しかし、何にもまして、このような機会は各人が他者をより良く理解する手助けになるでしょう。敬具

この手紙に拠れば、オーガスティン家にとっても、湯浅たちをもてなしたことがとてもいい経験になっていたことが分かる。しかしそれ以上に、湯浅はアメリカの繁栄はキリスト教精神に根ざしたものであること、各家庭にそのような精神が受け継がれていることを感じ取ったのだった。

（3）学生集会に参加して得た確信

更に、クリスマス休暇期間（1919年12月30日～1920年1月2日）⁹にアイオワ州デモインでの学生集会に参加した影響も、湯浅にとって相当大きいものだった。従来の研究等では、このデモインの集会は妻となる鵜飼清子と出会った場所として知られているが¹⁰、実は湯浅の将来を方向付ける重要な集会でもあった。ヘイズの報告書には、この集会に参加した直後に書かれた湯浅の書簡が紹介されている¹¹。とても重要な内容を含んだこの書簡を以下紹介する。

デモインでの集会は絶対に忘れられないもので、私にとって大きな意味がありました。いくつかのことは深い印象を残したもののまだ十分に理解できていませんが、以下の点は現時点で明確になっています。

1. 現在のアメリカ人の生活において極めて重要で根本的な力となっているキリスト教。これまでの私は、アメリカ人クリスチャンたちがキリストに従おうと努力している誠実さと熱心さを鋭く感じたことはありませんでした。私はキリスト教とアメリカ人クリスチャンたちのことを真剣に受けとめ始めています。
2. 「自己中心主義」対「奉仕の人生」。世界宣教という最大級の目的へ忠誠と献身を示す気高い姿は、私の自己中心主義な生き方が実に惨めであることを気付かせてくれました。

私は視点をエゴへの奉仕から神と人類への奉仕へ移しました。自分1人のために生きるとは、自らを滅ぼすようなものです。私はクリスチャンになりたいと思いました。

3. 神とキリスト。キリストが私にとって真実な存在になったので、神の存在も私にとって真実になりました。そして私は、キリストの特徴を生きて証する人々と対面したので、キリストは私に真実な存在となりました。更に明らかになったことは、偉大なクリスチャンのリーダーたちは、自らのインスピレーションの源としてイエスの十字架を背負っているということです。私はこの事実の意義を見出さなければなりません。また、神が生きている存在であることをもっと学ばなければなりません。

4. 祈り。私は、かつては祈りをしていました。しかし、過去5年間、祈りたいと願った時はあったけれども祈らなかったし、祈れませんでした。私の宗教生活が新しい夜明けを迎えると共に、私は祈り始めました。今となっては、どうしたら祈りなくしてクリスチャンとして熱心に生きられるのか分かりません。

5. 交わり。いかなる人間関係も、真の主にある交わり以上に貴重なものはない。いかなる交わりも、共通の信仰や共通の理想と目的に基づいている交わり以上に人を触発させるものはない。私はこのような交わりを日本人仲間との間に見つけました。彼らは日本を軍国主義や物質主義、あらゆる形の不正義や非人道的なことから救うため働く準備ができています。私は、特に日本人女子学生で我が国の再建という壮大な仕事を共有しようとする意志のある人と会うのが嬉しいのです。彼らは若い日本の希望です。

6. 国際主義とキリスト教。キリストの言われるとおり神を私たちの父として受け入れ、世界の人々が我々の兄弟だと信じるなら、国際的で人種を越えたキリスト教の考えはひどく分かりやすい。それは、異なる人々の隔てを克服する本当の基盤となります。例えば日本人と中国人とか、朝鮮人と日本人などが当てはまります。私たちは兄弟であり、兄弟関係の番人です。今日我々の有する不正や邪悪なことは、我々にとって共通した敵です。結局のところ、私たちは正義と博愛のために同じ戦いを戦っている同士なのです。これが、既に自由な考えを有している人々を、東洋における自由な動きを活発にするために送り出す手段や方法を模索している理由です。敬具 湯浅八郎

この湯浅の書簡から分かることは、デモイン集会から湯浅は益々キリスト教信仰への確信を回復し、軍国主義や物質主義を克服するために、キリスト教に基づく国際主義を広めたい、仲間と協力して、特に中国朝鮮の人々と兄弟愛を持って友好な関係を築いていきたい、という熱い思いに到達した、ということである。

そもそもこのデモイン集会とは正式には学生ボランティア会議 (Student Volunteer Convension) と呼ばれ、北米 YMCA 同盟総主事ジョン・R・モット (John R. Mott) の主催した学生集会であった。モットは世界的エキュメニカル運動 (教会合同運動) を推進した世界

的指導者であり、国際平和の推進者として1946年にノーベル平和賞を受賞している。国家を超えた人間同士の交わりという根源性を湯浅はこの集会で感じ取ったのである。

シカゴ神学校のオゾラ・S・デイビス博士（Ozora S. Davis）はこの書簡を1000部コピーし、シカゴの牧師たちに配ったそうである。博士は学生ボランティア会議の講演において湯浅とのインタビューから最大級のインスピレーションを得たと述べ、またはこの書簡から引用していたとの報告がヘイズにあったほどであるから、湯浅の「回心」が周囲のアメリカ人にも目を見張るものと映っていたことが分かる。

ヘイズは、湯浅の態度変容が本物であることを示す出来事として、次のようなエピソードを報告書で紹介している¹²。ある中国人学生がインフルエンザの影響で亡くなった時、湯浅は即座に中国人学生クラブにお悔やみの手紙を送り、棺に入れる花輪を注文し、後に4名の日本人学生を連れて葬儀に出席した。中国人たちは、敵国民と見なしていた人による思慮深い行動に感動したと言う。ヘイズは日本で中国人学生のための働きに数年間関わってきた経験があり、その頃は両国間の緊張が高まっていた時であった。キリスト教精神に基づいた国際親善を湯浅が正に体現したエピソードと言えよう。

デモイン集会のあった1920年に湯浅は博士の学位を得たが、ヘイズによれば、その時点で研究生生活を続けるべきか、何らかのキリスト教的奉仕活動に関わっていくべきか、真剣に悩んでいたと言う。実際は、その後京都帝国大学に招聘されるので研究者としての生活を続けることになるが、朝鮮人や中国人をはじめ、諸外国の人たちとの交流については強い関心を持ち続け、YMCA 活動にも非常に協力的だった。

以上確認してきたように、湯浅はこの集会で信仰の回復と、以後の人生について強い確信を得ていった。特に5番目と6番目に挙げたような一国中心主義や軍国主義的国家ではなく、国際主義の立場に立って日本を再建していきたいという熱意が伝わってくる。このような決心が、その後の湯浅の言動の根底になったと考えられる。

以上見てきたように、湯浅八郎がYMCA で経験した様々な出来事が、その後の湯浅の生きる指針になっていったことが明らかになった。

4. イリノイ大学 YMCA の活動

(1) 「外国人学生国際親善委員会」について

湯浅八郎がその活動内容から大きな影響を受けたイリノイ大学 YMCA は、1873年2月3日に創立されている¹³。中でも、湯浅が関わった上記の活動は、イリノイ大学では International Friendship Committee あるいは Committee on Friendly Relations Work among Foreign Students とも呼ばれていた YMCA の一部門によって企画運営されていた。実は、この部門はイリノイ大学特有のものではなく、全米各地に同名組織が活動を展開していた。

なお、英語表記で **Committee on Friendly Relations among Foreign Students** と呼ばれている組織について、統一的な日本語表記はない。シカゴ大学医学博士の学位を取得した加藤勝治は、1914年に執筆した記事の中で「余は一年前米国青年会万国委員の嘱託に依り日本人学生間に訪問的活動を始め」と述べている¹⁴。一方、加藤勝治の略歴によれば¹⁵、1913(大正2)年7月に「米国国際親善委員日本人学生部幹事」と記載されている。加藤は1916年より刊行が開始された英文雑誌 *The Japanese Student* の編集長を務めたが、同誌は **Committee on Friendly Relations among Foreign Students** 協力のもと刊行されている。シカゴ大学所蔵史料を確認したところ、加藤は1917年7月8日付書簡に **Committee on Friendly Relations among Foreign Students** 公式の便せんを用いていることから、加藤がこの組織の一員であったことが分かる。そこで本稿では、加藤の略歴での表記を参考に、「外国人学生国際親善委員会」という訳で表記を統一したい。

先にも触れた英文雑誌 *The Japanese Student* の発行協力者である「外国人学生国際親善委員会」の委員長(chairman)には、長老教会所属の事業家クリーブランド・H・ドッジ(Cleveland H. Dodge)の名が記されている¹⁶。また、理事の中にジョン・R・モットの名前もある。この委員会の主たる目的は、学生たちのキリスト者的性格の発達を促し、奉仕の精神及び国際的な善意の心を刺激しながら、全ての国籍の学生たちの間に真の友好関係を築くことであった¹⁷。モットらは世界的な学生の連携を目指していたのであり、在米日本人学生の支援もこうした彼らの運動の一環と見なしていたと考えられる。

「外国人学生親善委員会」の源流は、1888年にYMCA指導者たちによって組織された **Student Volunteer Movement for Foreign Missions (SVM)** であり、モットをそのリーダーに据えて活動が開始された。この活動はアメリカ全土の大学で始められ、毎週宣教について学ぶ集会を開いた。「福音を世界の同世代に」という合い言葉のもと、活動は進められた¹⁸。更にもう1つ大きな契機となった出来事がある。モットは、コーネル大学生として1886年にマサチューセッツ州マウント・ハーモン(Mount Hermon)で開かれた学生夏期学校に参加し、キリスト教宣教への熱意をかき立てられ献身を決意しているのだが、実はその時にモットが中国人留学生と出会い、日本やアメリカで学ぶ中国人に対して大きな関心を持つに至った。そのことがこの委員会を創設する根底の出来事としてあることを指摘しておきたい。モットはその後中国人学生団体の活動にも常勤主事(full-time secretary)として参加している¹⁹。アジアを中心とした異文化との交流に、モットは学生の段階から強い関心を持っていたのである。

モットは1908年に発行された著作 *The Chinese Student Migration to Tokyo* の中で、東京に来ている中国人留学生の数が500人から翌年には2000人になると予想し、物質社会に囲まれた留学生たちの倫理や宗教上の状態を健全に保つために、日中YMCAが協力していく必要があると訴えている。

1912年に、モットが前述のドッジとお互い外国人学生の欲していることに関心があると話し

をしていると、アンドリュー・カーネギー（Andrew Carnegie）や「ニューヨーク家具」を営むウィリアム・スローン（William Sloane）を紹介された。彼らはモットの計画（東京からニューヨークに至る世界の主要な大学に、学生たちが西洋の良い面に触れて互いに友好関係を築き理想を高め合うために、有能な人物を派遣するというもの）に共感して資金援助を申し出てくれた。これにより、モットは「外国人学生親善委員会」を立ち上げ、チャールズ・ハーレイ（Charles Herrey）の尽力とカーネギーの協力の下で、活動を開始した。カーネギーのところでは、中国、日本、インド、トルコ、ギリシャ、シリア、アルメニア、ペルシャの各国から75人の外国人学生が世話になり、1938年までに委員会には6人の主事（secretary）が配置されるようになった²⁰。

このように、「外国人学生親善委員会」はモットの国際的な学生交流計画を実現推進するための組織として設立され運営されたのである。

（2）イリノイ大学「外国人学生親善委員会」の活動実態

湯浅は積極的に「外国人学生親善委員会」での活動にも参加し、中国、インド、フィリピン、ロシア等の出身学生と交流があった。

イリノイ大学で会として正式に始まったのは1918年で、記録としては2年目にあたる1919年度の活動記録から現存している（*Report of Friendly Relations Work among Foreign Students Y.M.C.A. University of Illinois, 1919-1920*）。同記録に拠れば、1919年度に在籍していた外国人学生は201名（高校やサマーセッション参加者を含めると210名）。その内訳は51名が中国、38名がラテンアメリカ（うちメキシコ12名、ブラジル10名）、以下フィリピン31名、日本20名、ロシア14名、インド10名と続き、全部で31カ国の出身者が大学に集っていた。

彼ら外国人学生のための活動はYMCA「外国人学生国際親善委員会」によって提供されていた。特に次の5つの点について、取り組みがなされていた²¹。1つには個々の学生に必要なサービスの提供、2つ目はアメリカのクリスチャン家庭でもてなすこと、3つ目として学生YMCA主催の社交会への参加を促すこと、4つ目に外国人学生同士及びアメリカ人学生との個人的な交友関係を生み出すこと、そして5つ目に学生夏期学校や他のクリスチャン学生集会への参加意欲を促すことであった。これら5種類の取り組みを通して、各国の未来のリーダーがより良い国際理解の道を切り開き、何より最も重大なイエス・キリストとの友好関係を築けるようにすることがより遠大な目的とされた。1919年度の具体的な活動実態については、次の通りになっていた。

表2 1919年度イリノイ大学YMCA親善プログラム主要行事 (PRINCIPAL EVENTS OF FRIENDLY RELATIONS PROGRAM UNIVERSITY OF ILLINOIS Y.M.C.A. FOR YEAR 1919-20)

開催年月日	内容	参加者
1919年7月18日	夏期講習に全国各地から集まった学校教師のための国際パーティ	420名
1919年10月10日	中国語聖書学び会(再結成)毎週金曜日、5月7日まで	総勢18人登録、平均参加者10名
1919年10月24日	秋学期国際交流会	参加者140名(半数がアメリカ人、半数が外国人)
1919年11月28日	日本語聖書学び会の組織 5月まで継続	登録者は6名、平均参加者4名
1919年12月20日-1920年1月4日	クリスマス休暇招待(Christmas Vacation Invitations) 外国人学生をアメリカ人家庭の夕食に招いた	70名の外国人学生を招待
1919年12月22-28日	休暇中に帰省できない学生のためのクリスマス・プログラム	参加者の三分の一は外国人学生
1919年12月31日-1920年1月5日	デモイン学生ボランティア会議	イリノイ代表团には8名の外国人学生が含まれていた
1920年1月15-17日	オランダの世界学生キリスト者連盟(World Student Christian Federation) Carl Rutgers 博士の訪問。市民及び教師団と懇談及び学生・教師団と懇親会	120名
1920年1月23-24日	中国の R. H. Stanley 訪問。中国人学生への講演及び教授陣と昼食会	
1920年2月24-25日	南アメリカ J. C. Field 訪問。南北アメリカ間関係についての講演。リマとペルー(フィールド氏がYMCAを組織する地)出身の5人の学生と会合	学生5名
1920年3月25-28日	Sherwood Eddy Meetings 18名の外国人学生がクリスチャンになる決心をした。そのうちの10名(全て中国人)は洗礼を受け、教会に通うようになった。	18名
1920年4月2日	第二学期の国際交流会と中国に1年間赴任する外国人学生部長の送別会	102名
1920年4月15-18日	Friendly Relations Committee 主事会議他。ホストを囲んでの懇談会、夕食と歓談 学生及び教員との昼食会。国ごとの外国人学生集会。教会、日曜学校、若者の集会における友好関係(Friendly Relations)について話し合う	
1920年5月	新しい学生議長の下で親善委員会(Friendly Relations Committee)再組織。議長と委員会がこの1年間の方針やプログラムの詳細が話し合われた。	ジェノヴァ集会代表団の外国人学生26名(中国8名、日本8名、フィリピン5名、インド4名、パナマ1名、アルメニア1名)
1920年6月3-6日	マニラYMCA学生主事 Isaac Barza の訪問。	フィリピン人学生5名と個人的集会
1920年5月25日	シャンペーン商工会議所の外国貿易に関する集会。7名の外国人学生による米国と自国の貿易関係についての10分スピーチ	ブラジル、ペルー、メキシコ、フィリピン、日本、中国、インド各1名

出典：Student Affairs Student Organizations YMCA Subject File, 1886-2000, Series No. 41/69/322, Box No. 12 (イリノイ大学史料室所蔵)

以上のように、学生同士や地域、教職員との親睦を深める懇親会、聖書を学ぶ会、クリスマスを祝う時など様々に且つ頻繁に企画運営されていたことが分かる。記載されている人数の外国人学生全てがクリスチャンであるとは限らない。ただし、あくまでもYMCAとしてはキリスト教精神を基盤とした国際親善事業を行い、それを通してイエス・キリストとの出会いをしてほしいという伝道目的も少なからず含んでいた。湯浅も、こうした行事にたびたび参加していたことは、既に述べた通りである。

なお1920年度の活動記録に拠れば、在籍した外国人学生計280名のうち、91名が中国からと

一番多く、次にインドからの36名、フィリピンから35名、日本から22名、ブラジルから15名、メキシコから13名となっている。極東アジア出身学生が185名と最も多い。留学生の増加は1920年代に入ると更に著しくなり、特に中国からの留学生が大幅に増えている。1921年度の統計を見ると中国出身学生の数115名に、フィリピンからは50名、インドからは36名、日本から26名となっている。その他の国からは10名以下であり、アジア4カ国出身の学生数が突出していた。このように人数に多少のばらつきがあるものの、世界各国から留学生がイリノイ大学に在籍しており、1929年度第二学期の学籍登録者にはアジア4カ国以外に、メキシコ、ペルー、カナダ、ドイツ、ジャマイカ、ロシア、イギリス、オーストラリア、チリ、ジャワ、ハンガリー、ボリビア、パナマといった国籍が含まれていた。なお、女子学生にはフランス、フィリピン、スコットランド、中国、ユーゴスラビア、ロシア、ハンガリーからの学生が含まれている。年によってはトルコ、南アフリカ、ポーランド、ブルガリアなどからの留学生も含まれている。とても多彩な国から学生が集まっていることが分かる。正に、同大学は国際交流を展開するには整った環境だったと言える。

5. 帰国後の困難

(1) 京都帝国大学滝川事件

湯浅は当初日本に帰るつもりはなかったようであるが、思いがけず京都帝国大学農学部創設メンバーとして声がかかり、1922年8月からは文部省在外研究員に任命され、ドイツとフランスで昆虫学の更なる研究を進めている。帰国後1924年に京都帝国大学農学部教授に招聘された。学問としては、生態学の視点を取り入れて、広い視野から研究と教育を行った²²。

在任中は1933年、滝川事件に遭遇することになる。これは、法学部教授滝川幸辰の論文での見解が自由主義すぎると問題になり、鳩山一郎文部大臣が京大側に免官処分を要求し、最終的に免職になった事件である。湯浅八郎はこの時、農学部評議員としてこの議論に接した時、「これこそ大学の本質が問われるような問題だということを、おぼろ気ながら直感し」²³、大学自治の観点から反対の立場を示した。このことは、文部省側に付く人からすれば見過ごせぬ判断であり、要注意人物として湯浅はマークされることとなった。

(2) 同志社事件

1935（昭和10）年には推薦を受けて第10代同志社総長に就任することとなった。ところがこの在任中軍部との対立で苦慮することになる。滝川事件に反対した上にキリスト教主義の学校で総長をしているという点で軍部から攻撃対象と見られていたことは否定できない。その点について、湯浅自身次のように語っている。

私が同志社に行ったのは、国立大学の学問の独立自由の最後の砦と考えていい京都大学が、あの滝川事件を通して学問の自由を守るという当然の果敢な闘争に、敗れるべくして敗れ去った後であって、(軍部や右派にとって)目障りになるのはただ一つ、同志社というキリスト教学園だけだったんです²⁴。

1937年12月に湯浅は総長を辞任しているが、その引き金となった1つが、配属将校の引き上げ問題であった。当時同志社に配属されていた陸軍中佐が、湯浅の教育方針とは絶対に一致しないから辞めると言い始めた。文部省は将校を怒らせないようにと諭すだけで無力な存在だった。この時のことを湯浅は「無力な、まったく時代に迎合する以外の何ものでもなかった文部省の支配の下にある同志社ですから、形式的、法規的には文部省のいう通りにしなければならない」²⁵と回想している。結局、将校の側のいいなりにならざるを得ず、更に同志社大学教授が思想的問題から2名警察に拘引されたことや教育勅語を誤読したとされる事件など1937年立って続けに問題が起き、湯浅は総長を引責辞任することとなった。

いずれの事件からも、当時の日本を支配していた狭い視野からの主張があったことが分かる。アメリカでキリスト教的国際感覚を獲得していた湯浅にとって、日本のこうした現状はどのように映ったのだろうか。

6. マドラス会議後、アメリカ滞在での経験

(1) アメリカ講演旅行での最初の確信

1938年12月、失業の身だった湯浅はインドのマドラスで開催されていた世界宣教会議(The International Missionary Conference, IMC)に日本のキリスト教会代表として、賀川豊彦や河井道子を含む20数名の一員として参加することになった。非西洋諸国からの参加者が過半数を占めた同会議では、欧米以外でのキリスト教の発展と、教会の一致について話し合われた。そして、その宣教大会で得られたメッセージを、アメリカのクリスチャンに伝えるよう湯浅は依頼を受け、代表団を組んで渡米することとなった。日本人からの代表は湯浅のみで、後は中国人とフィリピン人各1名、インド人2名が選ばれ、団長はアメリカン・ボードの教育部長で同志社にもいたことのあるルース・シーベリー(Ruth I. Seabury)が務めた。こうして1939年1月以降、当初は2ヶ月の予定でアメリカ各地を講演旅行して回ることとなった。

イリノイ大学史料室には、イリノイ大学YMCA総主事を務めていたヘンリー・ウィルソンとの間で交わされた往復書簡19通が保管されている(表3参照)。書簡は1934年から1946年までに交わされたもので、大きく分けて3つの時期に分類できる。第一に、湯浅が同志社総長を務めていた1934年から1936年まで(書簡番号1から5)。第二に、湯浅が渡米した直後から太平洋戦争終結までの1939年から1944年まで(書簡番号6から17)の12通で、渡米直後1939年に

両者が頻繁に交わした書簡が多数含まれている（8通）。第三に、太平洋戦争後日本に帰国する直前の1946年の書簡（書簡番号18, 19）である。

イリノイ大学 YMCA と湯浅八郎との関係や、これまで知られていなかった1939年以降の渡米実態の一端と湯浅の心の内を知ることができる貴重な史料と言える。以下、第二期の書簡を中心に、より具体的に内容を見てみよう。

表3 イリノイ大学所蔵湯浅八郎書簡リスト

区分	番号	日付	宛先 to	送り主 from	備考
第一期	1	1934年12月14日	to Yuasa	from Wilson	
	2	1935年11月25日	to Yuasa	from Wilson	
	3	1935年12月18日	to Wilson	from Yuasa	同一内容複数あり
	4	1936年1月15日	to Yuasa	from Wilson	
	5	1936年3月31日	to Wilson	from Yuasa	
第二期	6	1939年3月3日	to Wilson	from Yuasa	Morton Hotel の便せん
	7	1939年3月7日	to Yuasa	from Wilson	
	8	1939年3月19日	to Wilson	from Yuasa	Hotel Severin の便せん
	9	1939年3月30日	to Yuasa	from Wilson	
	10	1939年5月9日	to Wilson	from Yuasa	Beloit College の便せん
	11	1939年5月15日	to Yuasa	from Wilson	
	12	1939年7月25日	to Wilson	from Yuasa	独ブレーメンより
	13	1939年11月15日	to Yuasa	from Wilson	
	14	1940年8月27日	to Wilson	from Yuasa	
	15	1940年10月5日	to Yuasa at Berkeley	from Wilson	
	16	1943年9月7日	to Yuasa at Boston	from Wilson	
	17	1944年2月15日	to Yuasa at New York	from Wilson	
第三期	18	1946年7月1日	to Yuasa	from Wilson	
	19	1946年7月15日	to Yuasa	from Wilson	

出典：「湯浅八郎」ファイル（イリノイ大学史料室所蔵）より作成

第6書簡は、マドラス会議報告のためアメリカに再来日して約2ヶ月たった1939年3月3日で、ミシガン州ランド・ラピッズのホテルから湯浅より送られたウィルソン宛書簡である。当初は2ヶ月の予定だったので講演旅行も終わりに近づいていた頃のはずだが、「今後少なくとも数ヶ月か1年ほどはアメリカに留まって社会的要請により（各地を）訪問する予定」と綴られているので、日程の延長が決まっていたということになる。しかし、同行していたインド代表は既にチームから離れシカゴのホテルで寝込んでしまったと言う。彼らのスケジュールはひどく過密だったため、久々にイリノイ大学のあるイリノイ州シャンペーン市を訪れることを楽しみにしているが、キャンパスで静かに休む機会を与えて欲しい、とウィルソンに懇願している。

その返信である第7書簡(1939年3月7日付)でウィルソンは、活動予定を取りやめたいという提案を支援すると伝え、今後の予定についても調整できるよう手伝うと全面的に湯浅を支援しようとしていることが分かる。ウィルソンはこのように、たびたび湯浅への協力を惜しまない姿勢を表明しており(第9書簡, 1939年3月30日付)、湯浅もウィルソンを信頼していたことだろう。

第8書簡(1939年3月19日付)は、インディアナポリスのホテルから湯浅がウィルソン宛に送ったものである。ウィルソンや旧友に会えたことの喜び、及び困難な状況にいることへの理解に対する感謝が綴られ、状況が改善したら自らを役に立たせたいと前向きな姿勢を見せている。

第10書簡(1939年5月9日付)では、これまでの疲れた、どこか弱気な文面から一転して、湯浅よりウィルソンに力強い報告がなされている。湯浅はアマーストなどアメリカ各地の訪問について綴った後、アメリカン・ボードの保護の下にいて更に12ヶ月はアメリカに滞在することになったこと、今更科学研究の分野に戻ることは難しく、キリスト教国際主義(Christian internationalism)に関する分野でなら、自分自身を役に立たせる機会がありそうと気付いたことを伝えている。「それは冒険のようですが、神様との冒険です。私は組合教会の活動の一端であるこの先駆的な事業に協力できることを喜んでいます」と抱負が述べられて、キリスト教的活動への関わりを強めていく意気込みが見受けられる。この講演旅行で、湯浅は自らの活動への自信と使命を覚えたのだった。この書簡に対し、ウィルソンは1939年5月15日付で返信し、キリスト教国際主義活動の必要性と、その活動が完結するまでが湯浅の担う奉仕であると述べて、湯浅を励ましている(第11書簡)。

1939年7月25日付のウィルソン宛書簡(第12書簡)では、湯浅の活動範囲がヨーロッパにまで及んでいたことが分かる。湯浅はジュネーヴ(Geneva)での欧米の諸教会の指導者が集まった非公式な会合に参加し、その後はYMCAの世界委員会開会式に招かれていた。ヨーロッパでの戦争への緊張度の高さに驚く一方で、アメリカに戻ったらアメリカン・ボードのグッドセル博士が湯浅のために予定を立ててくれて、9月より1年間、ニュー・イングランドの組合教会を訪問し、エキュメニカルなクリスチャンの交わりで新たな経験をすることを楽しみにしている、と伝えている。また、第14書簡(1940年8月27日付)では、アメリカン・ボードなどの尽力により当局から更に1年の滞在延長を許可されたことが述べられ、今後の主要な活動としてヨーロッパ、アジア、アフリカと北アメリカの各組合派(Congregational group)を結びつけ、世界教会(Church Universal)への貢献としてエキュメニカルな会衆主義を強めていくことを強調している。

このように湯浅は欧米各地での教会や集會に盛んに関わっており、信徒や国籍を超えた充実した交流の時間を過ごしていた。正に、キリスト教国際主義的活動に勤しんでいたのであった。

（2）日米開戦後の経験

既に見たように各地から講演の要請を受けて滞在期間は延長に継ぐ延長となり、湯浅のアメリカ滞在は多忙を極めた。社会講演旅行最初の頃はマドラスでの会議の様子を話していたが、一方で当時のアメリカ社会においては、日米関係で緊張が高まっていくのが徐々に感じられるようになってきた。そのため、各地の講演で、徐々に日米関係の話をする機会になっていったという。湯浅本人は、講演旅行の様子を次のように回想している。

（1941年になって）もうその時はマドラスの問題ではなくて、刻々に迫ってくる日米戦争の危機に対して、何とかして日米戦うべからず、平和を堅持したいというアメリカの良心ともいべきキリスト教会の指導者たちの要請にもとづいて、私は平和を中心にして各地を講演して歩きました²⁶。

ところが、1941年12月7日（日）、とうとう真珠湾攻撃と共に日米開戦の事態へと発展してしまった。皮肉にもこの奇襲攻撃の最中、湯浅はメイン州のある田舎の教会で「キリスト者の平和責任」という題で説教をしていたのだが、勃発した攻撃と共にアメリカの敵国人となってしまったのである。開戦翌日には、警察がスパイ容疑で湯浅のもとを訪ねにきた。しかしそのような状況の中でも、講演団長を務めたルース・シーベリーが湯浅を保護してくれ、ボストンの自宅に匿ってくれた。湯浅は各経験から培ってきたキリスト教精神を活かして社会貢献することを心に誓い、1942年5月頃許可を得てニューヨークに移住した。ニューヨークでは日本より帰国した宣教師たちを中心に、日本人救援委員会（Church Committee for Japanese People）が組織され（委員長はメソジストのアイグルハート宣教師夫人）、湯浅もその一員として在米日本人労働者の保護事業に従事した。これに先かぎって、ラガーディア・ニューヨーク市長は放送で市民に呼びかけ「アメリカに來ている日本人は決してこの戦争の責任者ではない、むしろ被害者なのだから、この人たちに対して少しでも迫害をするようなことは許されない」²⁷と訴え、実際日本人のために倉庫を開放してベッドと食事を提供し、仕事や住まいを失った日本人のための居場所を作った²⁸。

また、湯浅は西海岸の日系人強制収容所にも慰問して回った。日米開戦中もこうしてアメリカに留まり、在米日本人のための活動を推し進めていたのである。湯浅はこのように自由でできたことについて「おそらくこういうことが許される背後には、私がどのような理由でアメリカに來ていたかということが官憲によく分かっていたから」²⁹と述べている。これは、スタンフォード大学で日本学講座を担当していた市橋倭をはじめとして強制収容所に収容された西海岸在住の日系人たちの扱いとは正反対だった³⁰。

一方で、湯浅は戦時下におけるアメリカの様々な「良心」について、見聞きしている。先に述べたラガーディア市長の言動もそうである。その他にも、アメリカでは日系人強制収容に対

してもすぐに批判的な意見が出たとか、市民レベルで戦後を見据えた平和研究会議が多く組織されたことなど、アメリカ社会の民主主義の柔軟さと奥深さを感じ取った。

(3) YMCAの限界

キリスト教信仰を土台として国籍を超えた国際親善を展開してきたYMCAであるが、国際親善を学内やYMCAの活動内で進めるだけでは、世界平和を実現することは難しい面がある。留学生1人1人には属する国家が背景にあり、国家同士の外交関係や対外摩擦などが生じると、YMCAの活動も大きく影響を受ける。イリノイ大学YMCAには、1932年上海の中国YMCAより日本軍の侵略に関する実態を伝える報告書が送られていた³¹。

満州への日本侵攻はこの地域におけるあらゆる活動に深刻な問題を引き起こしています。ハーグ氏(H.L. Haag)はハルビンで9月に起きた暴動以降、ロシア人YMCAが直面している深刻な危機について書き記しています。しかしながら、近頃結成されたYMCA友の会(the Club of the Friends of the Y.M.C.A.)と呼ばれる団体を通じて、仲間たちが助けに来てくれました。ハーグ氏によれば、この団体にはハルビン在住のあらゆる職業人(教授、医者、弁護士、商人、役人)70名が参加しているそうです。彼らはこの難局においてYMCAの側に立って協力を申し出てくれた人たちです。メンバーにはロシア人、アメリカ人、ドイツ人、中国人が含まれています。ハーグ氏は伝えています「この会への参加を拒む人はいない。事業が凍結され、暴動による空虚感から、彼ら英雄のような友人たちはYMCAの活動を進めていく道を見出した」と。

中国YMCA、上海

1932年5月16日

このように、世界に広がったYMCAのネットワークから、地域の事件や実情が伝えられるのが容易になっている。

これに対し、イリノイ大学所蔵史料には同志社が1937年12月10日付で発表した日中戦争に対する声明文(英文)が保管されている³²。湯浅が何らかの形でイリノイ大学YMCAに渡したものであろう。それによれば、日露戦争は満州を通過して朝鮮半島へと進出しようとしていたロシアの勢いを押しとどめて極東に平和をもたらしたことで、日本は満州を領土として獲得しようとする意図はなく、あくまでも戦略的に必要だから進出しているだけである。満州が中国へ帰属しているというのは名ばかりで、現在満州国と呼ばれている地域は本来中華民国に属するものではない、と綴られている。何故同志社がこのような文書をわざわざ作成したのか。恐らく湯浅が同志社総長を辞任した後で、政府との関係を修復するために当局が作成したものであろう。一方の湯浅は、YMCAを通じて世界の動向を見ていたため、一層日本政府への懐疑を

抱いていたと考えられる。しかし、YMCAでは国家紛争の解決はできないことも事実と言えるだろう。

7. まとめ、戦後の活動へ

以上、湯浅八郎の国際感覚が形成されるにあたり、アメリカ滞在での経験がどのように影響したのか考察してきた。特に、若き頃のイリノイ大学YMCAでの経験で湯浅がどのように変わったのか、同大学史料室所蔵史料より明らかにした。

湯浅八郎がイリノイ大学大学院に留学中に参加していたYMCAでは、外国人学生国際親善委員会主催の交流プログラムが盛んに行われた。留学当時、信仰的精神的にかなり追い込まれていた湯浅はYMCAでの主事らに親身にしてもらい聖書の学び会にも参加するようになった。その後アメリカのあるクリスチャン家庭に招待され、新興国アメリカの文化文明を支えるキリスト教の精神が一般家庭にも浸透していると感じ取った。更に、学生集会に参加してキリスト教精神による軍国主義物質主義の克服や、国際親善の推進を強く意識するようになり、湯浅自身キリスト教信仰を回復することになった。こうしたイリノイ大学での経験が、湯浅の広い国際感覚を育てたのであり、帰国後偏狭な国家主義と対立したのは必然的だったと言える。

また、戦時中のアメリカ滞在中も、少なからず湯浅の思想形成に大きな影響を与えた。1939年からの2度目の渡米は、当初とても過酷なスケジュールではあったが、今更科学研究分野に戻ることも、キリスト教国際主義の働きに関わりたいという思いを強くすることとなった。また、日米開戦後のアメリカの民主主義的動向を見聞きしたことで、最初の渡米同様アメリカにおける自由や民主主義、そしてキリスト教精神を湯浅自身も信条としていった。

ただし、YMCA活動自身は国際親善を促しても、国家間の紛争や意見の対立を解消することはできなかった。実際中国と日本とで中国大陸における日本軍の動向への捉え方は異なっていた。こうした国家間の対立を克服するには限界があった。

最後に、湯浅自身の国際感覚の限界についても考えておきたい。湯浅は終戦後1949年にICU初代学長に就任する。アメリカの諸教会の援助により設立された同大学は、正にアメリカ的自由や民主主義の精神を根底に据えて建学された。そのような背景において作られた大学であるから、ある意味、湯浅は初代学長として適任だった。つまりアメリカを熟知していること、キリスト教国際主義の立場だったこと、両者がICUの建学の精神にも合致した。ただし、あくまでもアメリカをバックにした国際主義であることは留保すべきではないか。同じ戦時下に国際大学の設立を訴え、上海に逃げていたキリスト者田川大吉郎³³（明治学院長、基督教教育同盟会理事長）と対比すれば、湯浅の言動はアメリカの支えのあったからこそと考えられる。

日米開戦後に湯浅がアメリカに留まったのは単に教会のバックアップによるものか、それともそれを上回る政治的力学が働いていたのかについては、今後の課題としたい。

本研究は、科学研究費研究課題「近代日本における在外友好・学術交流団体形成過程の研究」（基盤研究（C））による研究成果の一部である。

注

- 1 武田清子『湯浅八郎と二十世紀』教文館，2005年，8頁
- 2 湯浅八郎他『私の生きた二十世紀』日本基督教団出版局，1980年，14頁
- 3 辻直人『近代日本海外留学の目的変容』東信堂，2006年
- 4 同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想 湯浅八郎の日本とアメリカ』日本YMCA 出版部，1977年，29～30頁
- 5 “Dr. Yuasa, Hachiro Doshisha Univ. Japan”, *Student Affairs Student Organizations YMCA Subject File, 1886–2000*, Series No. 41/69/322, Box No. 6（イリノイ大学史料室所蔵）
- 6 *Report of Friendly Relations Work among Foreign Students Y.M.C.A. University of Illinois, 1919–1920*, pp. 2–3
- 7 *The Japanese Student*, Vol. III, No. 3, December 1918, p.100, p.109
- 8 *Report of Friendly Relations Work among Foreign Students Y.M.C.A. University of Illinois, 1919–1920*, pp. 4–5
- 9 同志社前掲書，30頁。なお，表2中の日程とずれがあるが，いずれも引用のママとした。
- 10 武田前掲書，51頁
- 11 *Report of Friendly Relations Work among Foreign Students Y.M.C.A. University of Illinois, 1919–1920*, pp. 5–6
- 12 *Report of Friendly Relations Work among Foreign Students Y.M.C.A. University of Illinois, 1919–1920*, pp. 6–7
- 13 Carl Stephens, “A Brief History of the University Y.M.C.A.”, *Student Affairs Student Organizations YMCA Subject File, 1886–2000*, Series No. 41/69/322, Box No. 5（イリノイ大学史料室所蔵）
- 14 加藤勝治「在米日本人学生問題」，日本基督教青年会同盟『開拓者』第九巻，第九号，1914年，61頁
- 15 「故加藤勝治教授の履歴」『日本血液学会雑誌』第24巻第4号，1961年8月，2頁
- 16 *The Japanese Student*, Vol.I, No.1, October, 1916. ドッジは1917年にC・H・ドッジ財団を設立，大戦で得た多額の利益を今度は「人類の発展」のために使う目的で，医療や保健分野を除く文化的慈善的事業やYMCAへの支援を積極的に行っている。
- 17 Chas. D. Hurrey, “International Friendship among Future Leaders”, *The Japanese Student*, Vol. I, No. 1, October 1916, p. 4
- 18 Michael Parker, “Mobilizing a Generation for Missions: The Student Volunteer Movement

- mobilized a generation of college students for the cause of world evangelization”, Christianity Today, posted in August 6, 2009 (<http://www.christianitytoday.com/history/2009/august/mobilizing-generation-for-missions.html>)
- 19 C. Howard Hopkins, *John R. Mott: A Biography*, Eerdmans, 1979, p. 420
 - 20 Hopkins, *ibid.*, p. 421
 - 21 *Report of Friendly Relations Work among Foreign Students Y.M.C.A. University of Illinois, 1919–1920*, p. 1
 - 22 武田前掲書, 53頁. 同志社前掲書36頁.
 - 23 同志社前掲書, 40頁
 - 24 湯浅他前掲書, 19頁
 - 25 湯浅他前掲書, 20頁
 - 26 湯浅他前掲書, 23頁
 - 27 湯浅他前掲書, 25～24頁
 - 28 同志社前掲書, 62頁
 - 29 湯浅他前掲書, 24頁
 - 30 辻直人「市橋倭研究の意義—その生涯における異文化体験とアイデンティティ・クライシス—」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第7号, 2015年3月
 - 31 “International Program Materials”, *Student Affairs Student Organizations YMCA Subject File, 1886–2000*, Series No. 41/69/322, Box No. 6 (イリノイ大学史料室所蔵)
 - 32 “Dr. Yuasa, Hachiro Doshisha Univ. Japan”, *Student Affairs Student Organizations YMCA Subject File, 1886–2000*, Series No. 41/69/322, Box No. 6 (イリノイ大学史料室所蔵)
 - 33 辻直人「田川大吉郎の国際大学構想—基督教教育同盟会の中国人留学生受け入れ論と連合大学論の結節点—」キリスト教史学会『キリスト教史学』第58集, 2004年

Experiences that Influenced the Internationalism of Hachiro Yuasa during his Stay at the University of Illinois from 1916 to 1920

TSUJI Naoto*

Abstract

In this paper, I study what experiences during his stay in the USA influenced the internationalism of Dr. Hachiro Yuasa. I explore how participation in activities of the University of Illinois YMCA affected Yuasa, based on analysis of materials stored at the University Archives.

Hachiro Yuasa was a student of the graduate school of University of Illinois from 1916 to 1920. During that time, the university YMCA held many events for foreign students, which were organized by the Committee on Friendly Relations among Foreign Students. When he had entered the university, young Yuasa was depressed both mentally and spiritually. However, these events helped him to revive his faith in Christ and to understand how strongly the culture and civilization of the USA was supported by Christianity. He also realized that Christian internationalism was an effective opponent of militarism and materialism. It strengthened his resolve in facing what he perceived as narrow-minded nationalism, after returning to Japan in the 1930's.

Yuasa had to resign as president of Doshisha in 1937 because of his conflict with Japanese army officers. In 1939, he had a chance to go touring around the USA to report the results of a 1938 Christian Conference at Madras, India. During the tour, Yuasa heard the news that the Japanese navy had attacked Pearl Harbor. He chose to stay in the USA during the war, and saw some movements for peace among churches and ordinary American people. These experiences also influenced the internationalism of Yuasa.

His thought and experience culminated in the aim of establishing International Christian University, a new university in Tokyo. In 1949, Yuasa became the first president of the university.

* Correspondence to: TSUJI Naoto
Professor, Faculty of Integrated Human Studies, Hokuriku Gakuin University
11 Mitsukoji, Kanazawa, Ishikawa, Japan
E-mail: personnedroite@gmail.com

Keywords

Hachiro Yuasa, YMCA, Committee on Friendly Relations among Foreign Students, Internationalism, University of Illinois

